

片山真理

アーティスト

KATAYAMA Mari

自らの義足と身体を模した作品で多面的な世界観を創造し、国際的評価を受けるアーティストの片山真理さん。先天性の疾患のため九歳のときに両脚を切断し義足を使うことになったが、幼い頃は学校になじめず、学生時代には就職活動をも仕事が見つからなかったという。しかし、国境も世代も時空も超えるアートの力が片山さんの生きづらさを解きほぐし、進むべき道を照らし出した。そのターニングポイントの数々を、魅力的なエピソードと共に語っていただいた。



時空を超える「アートの力」を信じて

みんなと仲良くなりたくて

自ら選択した両脚の切断手術

——九歳のときに障がいがあった両脚を切断され、義足を使い始めたそうですね。

片山 幼い頃は両脚に補装具をつけていました。同級生から「真理ちゃんはこのができないから一緒に遊べないね」と言われるのが悔しかった。みんなと一緒に遊びたい、同じ靴で私も歩きたいと思っていました。

それで、九歳のとき、義足にしたらみんなと同じ靴が履けるからという理由で両脚を切つたらしいんですけれども……。自分が決断したこと忘れぬぐらい、脚を切る選択は私にとって重要じゃなかったんです。これとこれを貼り合わせたいから糊のりが必要というのと同じで、脚を切ることは自分の目的を達成するための手段の一つ。その選択は自然なもの

だったと思います。

——義足で歩けるようになるまでには大変な努力が必要ですね。

片山 漫画『ブラック・ジャック』のピノコが地べたを這いずり回りながら歩いたシーンを見た時に、「あつ、これは私だ」と思ったくらい努力をしました。手術から半年足らずで、義足で歩いて学校に戻りましたが、残念ながら、みんなと仲良くはなれなかった。見た目だけでは駄目だったんですね。

でもみんなと遊ぶ時間が少なかった代わりに、自分の得意なものとか好きなものに向き合う時間が多かったです。絵を描くこと、何かを作ること、歌うこと、本を読むこと……今やっていることと変わりません。

——アーティストになるベースがそ

の頃に培われたんですね。

片山 私だけでなく家族全員、作ることが大好き。母も祖母も曾祖母もお裁縫好きで、毎日ミシンや編み機はりの音が鳴り響いているような家でした。おじいちゃんの水墨画を描いたり、俳句や映画も大好き。週末になると、地元的美術館によく連れていってくれて、そこで一日中、私は飽きずに過ごしていました。絵の前に立つと、ずっと昔にこの絵を描いた画家も、今の私と同じ場所に立っていたんだと感じられる。このブラッシュストロークすく（筆跡）はそのときのものだ。そういうことが私の中にジーンと染みて、凄く嬉しかったんですね。

一千万円で作品が初めて売れたとき

アーティストの自覚が芽生えた

——その頃からアート作品を作ることを意識していたのでしょうか。

片山 いえ、身近なもののすぎて、母のお裁縫もおじいちゃんの水墨画も、自分の絵や詩もアートではないと。アートは特別なものであって、私たちがやっていることは趣味や生活の延長。アートをやっているという自覚はなかったです。美術館で出会ったのはマリー・ローランサンとか山口薫とか、名のある芸術家の作品ばかり。私は、何かを作ることが息をするように好きだったけれど、プロの芸術家とはやっていることが違うと線引きしていましたし、この先職業になるとは想像もしていませんでした。

——高校三年生のとき、公募展での

受賞が、アートの世界への入り口に

なったそうですね。

片山 母から手に職をつけるよう言



かたやま・まり●1987年埼玉県生まれ、群馬県育ち。太田市立商業高等学校から群馬県立女子大学、東京藝術大学大学院に進み、2012年に同大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程を修了。卒業制作が若手芸術家の登竜門「アートアワードトーキョー丸の内」でグランプリを受賞。自身の身体をかたどった手縫いのオブジェやペインティング、義足を用いて演出を行ったセルフポートレート作品などで国際的に高い評価を受ける。主な展示に「あいちトリエンナーレ」納屋橋会場(13年)、「無垢と経験の写真——日本の新進作家」東京都写真美術館(17年)、「第58回ヴェネチア・ビエンナーレ」アルセナーレ・ジャルディーニ(19年)、「home again」パリ・ヨーロッパ写真美術館(21年)、「Performer and Participant」テート・モダン(23年)など。主な出版物に『GIFT』(United Vagabonds刊)、第45回木村伊兵衛写真賞受賞がある。

われていたため、商業高校に進学し、簿記部とパソコン部と英語同好会に入っていました。とにかく企業に選んでもらえる人間にならないと就職できないと思って、頑張っていたんです。

でも、就職試験にはつきものの小論文が苦手でした。ファンタジーでもエッセイでもスラスラ書けるのに、小論文になると「うっ……」と詰まっちゃう。「こういう時事問題が出たら、こう書きなさい」ってルールを教わっても、思っていないことは書きたくない。身体が拒否反応を起こしてしまうんです。

たまたま、進路指導担当の先生は美術部の顧問をしていて、私が義足に絵を描いていることをご存じでした。「義足について何か思うことを書いてみたら？ 小論文の練習になるんじゃない」と言われて、文章を提出したところ、群馬青年ビエンナーレという美術の公募展に出してみなしかつて。先生に勧められるまま応募したら、その小論文が一次審査を通過して、次は作品を出しなさいと。——それで小論文に書いたことを作品にすることに。

片山 壁にかかっているものが作品だと思っていたので、とりあえず壁

にかけられるようにしなきゃと思ったんです。ホームセンターで買った木枠のボードに三つの絵を直描きし、三つの義足を付けて提出しました。義足はメガネと同じく私の身体の一部であって、個性を彩るアクセサリーであってほしい。それでいて、大地に根を張って私の身体を支える幹のようなもの。でも、義足には血が通っておらず、私の足ではなく道具の一つでしかないという、義足への三つの思いを表現したんです。審査員からはそのコンセプトが評価されて、奨励賞をいただきました。

ただ、作品自体は稚拙だって言われました。私、負けず嫌いなんですよ。じゃ、もっといいものを作ってやると。それで、どうしたらいいのか聞きたくて授賞式に出かけて行ったら、カフェの外で煙草を吸っている金髪の男性の周りに人だかりができています。その人が私を見つけて「君、片山真理ちゃんでしょ。審査員の東谷隆司あすまやたかしです」と。そして、私に向かって宣告したんです。「君は今日からアーティストだからね」って。——受賞をきっかけに群馬県立女子大学で美学美術史を専攻し、さらに東京藝術大学大学院に進学しまし

た。それでもアーティストで身を立っていくという感じにはならなかったんですか。

片山 進学しても自分がアーティストだという感じにはなれなかったです。私は「普通」より劣っているから、みんなと同じように就職して、結婚をして子どもを産んで、一軒家に住んで白い車に乗るといって、そんなステレオタイプな人生を送ることで、障がい者でも周りから認めてもらえるかもしれないと思っていましたね。リクルートスーツをいつも持ち歩いていて、授業後にハローワークの障がい者窓口に通っていました。でも、就職先は全然見つからなくて。——そのうちに気持ちがアートに向かって行ったり。

片山 東谷さんがいるんなアートの世界を教えてください。どういうことが美しいこととか、東谷さんの考え方を私なりに深めていきました。学生だから時間もあるし、アートをたくさん勉強できて、楽しくて楽しくて。

そのうちお仕事の依頼も来るようになって、東谷さんが企画した展覧会で私の作品が初めて売れたんですよ。A4サイズの写真作品。一万円

でした。

—— 作品がお金に換わったことで、アーティストとしての自覚も生まれたということですね。

片山 はい、もう自覚しないといけ

他者とのつながりが、 メッセージに力を与える

—— その後、アーティストとして活躍されますが、写真集『GUT』を拝見すると途中で作品に変化を感じます。

片山 二〇一六年の瀬戸内国際芸術祭への出展がひとつの転機になりました。群馬の自宅から香川県の直島に毎月通って、直島の人たちと仲良くなって、じゃ、一緒につくろうかとなって。それまでは、自分の部屋というクローズドな空間で、自分の身体をマネキンにして自分が作ったオブジェなどを演出してきたので、作品作りにおいて社会と関わってこなかったんですよ。そこに初めて他者が入ってきて、最初は違和感が凄かったんです。ちょうどこの頃妊娠したのですが、つわりがひどくてひどくて仕方がないみたいなの。でも、やり取りしていくうちに、作品と私が

ないと。買ってくれた人に向かって「私はアーティストじゃないんです」と言ったら怒られるでしょう。これからはアーティストとして生きていくと。大学院の一年生のときでした。

だんだんコミュニケーションできるようになってきて、なるほど、大丈夫だねと。

人をつくっていくことで自分ではできない規模になるし、メッセージ性とか伝わり方も変化するので、最初の違和感が楽しさに変わっていったんですね。他者とのコミュニケーションが作品に変わっていくのが、凄く楽しかったんです。

—— その経験は善足で履くことができるハイヒールを特注し、街やステージに立つ「ハイヒール・プロジェクト」にも影響を与えたんでしょうか。

片山 二〇一一年に「ハイヒール・プロジェクト」を始めたとき、最初は自分のためでした。ハイヒールを履いてステージに立ちたいから、そのために義足をつくって、靴をつくっていく。自分で自由な選択をし

たい。障がい者だから諦めることはないよねと。

でも、社会と関わっていくうちに、不自由なのは障がい者だけではない、社会が「女性だから」「男性だから」「ママだから」とタグをつけることで、不自由になっている人が凄く多いことに気付いたんです。このプロジェクトはみんなが必要としているんじゃないかと。だから、二〇二二年からセルジオ・ロッシと始めた「ハイヒール・プロジェクト」

第二弾では、障がい者というくくりだけじゃなくて、もっと開けた活動にしたいと思って取り組んでいます。

ただ、第一弾よりもずっと大規模なプロジェクトで、最初は正直怖かったです。でも、セルジオ・ロッシの工場では職人さんたちがみんな、自分やプロジェクトを知っていてくれて、この大きなプロジェクトをみんなで作っているんだと感じられました。それが強さになりましたし、みんなで作れるから怖くないと。これは直島での経験からのつながりなんだと感じています。

—— 活動を通じて、片山さん自身にも変化がありましたか。

片山 ある意味、私は障がい者らし

く生きていたんだと思います。障がい者だし、社会に認められるようにしなきゃと。でも、その生き方が楽じゃなかったんですよ。私らしく生きなきゃと思うことで、私らしくという枠に自分を閉じ込めていて。でも、その私らしさって自分でただ作っているだけなんですよ。プロジェクトを通して、こうした不自由な生き方から解放されていってるんだと思います。

最近はず育てを通して考えさせられることも多いです。娘は今年小学生になりましたが、彼女にとって私は私が普通だと思って生きてきたのに、彼女のコミュニティが広がっていくと「あれっ」と思う瞬間がいくつか来るだろうなと。その準備として、娘や彼女を取り巻く環境とか子どもたちに対して、自分のことをどう分かりやすく説明するかが最近の課題です。これは障がいがあってもなくても、難しいことですよ。でも一〇〇%の答えを与えてもいいじゃない。例えば「何で指が二本なの?」と尋ねる子には「君は何で五本あるの?」と返したり。そうすると「確かに何で五本なんだろう?」と友だち同士で考えてくれたりします。



イタリアでのセルジオ ロッシのデザイナーとの2ショット
(Photo by Herbert Hunger)

私の人生を振り返ると、障がいというものを隠して、気付かれないように

時空を超えて伝えていきたい

LOVE&PEACE&HOPE

—— あらためて片山さんにとってのアートとは、どういうものなんでしょう。

片山 以前は、展覧会に呼ばれて作ることは仕事だと自覚していて、「アートは職業です」と堂々と言いきっていました。お金になる仕事のアートしかなかったから、これは生活の手段だと。ほかに仕事があるんだったら、そっちをやりたいくらいい

うに生きてきた。特別扱いされたくなくて、世の中の普通に紛れ込みたかったんですね。でも、そんな姿を娘に見せてしまうと、きつと彼女も同じように私のことを隠そうと思う。それは生き方として健康的じゃないなと。今、私はハイヒールを履けるし、タイトスカートもジャケットもビシッと着れる。それはそれで気持ち良さを感じる反面、障がい者である自分を洋服で隠すことに負い目もあって、そこはどう決着をつけるか。私が義足にかっこよくアートを描いて外に見せることは、その決着なのかもしれないですね。

本気でそう思っていました。

ところが、ここ数年で考えが変わってきたんです。今年マドリッドのプラド美術館を訪問したんですが、そこでゴヤやベラスケスの作品を鑑賞しているうちに、作家の彼らとつながれる感覚になったんです。子どもの頃、おじいちゃんで行った田舎の展覧会での体験に似ているかもしれません。私の恩師で、スーザ

ン・ソントグの訳者でもある木幡和枝先生は「作品と出会うことで、一〇〇年前に生きた作家とも友人になれるのよ」と言っていました。それってこれなのかもと。アートは国籍も性別も年齢も時代も時空も超え、作家が生きた社会や意志をその作品から感じることができんですね。だから予言的なSFとか発明みたいなものかもしれません。

作家は自分の寿命よりも長く残る作品をつくる責任がある。そう考えると、アートは今日のご飯を食べるためのだけの単純な経済活動じゃない、という自覚に変わってきたんです。五〇年後、一〇〇年後に、私の作品が誰かと誰かをつなげていくかもしれない。責任を自覚し、娘も生まれたことで、時空と時代が前後に広がり、私がやっていることは今のためじゃないんだと感じています。

—— そうした思いの変化は、作品にどういう影響を与えていますか。

片山 明らかに作品の持つ規模感が変わりました。時間や距離感が広がることによって、ピンポイントのものにフォーカスしなくてもよい。五〇年後の人が見た時にどう分かっ

てくれるかな、どう伝わるかなと。もっと広く伝えることで、何かが変わるかもしれないという希望が持てるようになりました。

振り返ってみると、私は高校生の頃からアートに希望を持っていたんです。私とあなたの間でのけんかは、規模が変われば国家間の戦争にもなる。時代や時空を超えられるアートの作品を通じて共感が広がったら、世の中は良い方向に変わるんじゃないかって。だけど、それは私の仕事じゃないと思っていたし、私にはできないと思っていた。でも今は、世の中を変えていくために、私も何かができるかもしれないと思っています。

—— 作品を通じて伝えたいメッセージは。

片山 具体的に言うのは難しいんですけど、今私の義足に描いている「LOVE&PEACE&HOPE」のこの三つだけは本当に重要だと思うんです。希望を持つには平和がなければいけない。その平和に対しては愛がないといけない、そう信じたいですからね。

—— 本日は、ありがとうございます。